Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-06-03

声をめぐる考察 ： 『歌姫コンシュエロ』のウィーンへの旅

坂本, 千代

(Citation)
国際文化学研究 ： 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,45:55*-68*

(Issue Date)
2015-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009196

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009196

声をめぐる考察
―『歌姫コンシュエロ』のウィーンへの旅―

坂　本　千　代

はじめに

本稿ではジョルジュ・サンドの長編小説『歌姫コンシュエロ』*Consuelo*[1]（1842-43）のウィーンへの旅の部分（63章～81章）[2]に頻出する「声」についての言及に注目して、話したり歌ったりする時に用いる声がどのように描かれているかを主に考察する。テクスト中で声とそれに関連する「衣服」や「名」が、「性」を越えることや「国境」を越えることとどのように結び付けられており、読者はそこに何を読み取ることができるかを考えたい。

『歌姫コンシュエロ』（全105章および「むすび」）とその続編『ルードルシュタット伯爵夫人』*La Comtesse de Rudolstadt*（1843-44、全41章、「エピローグ」および「フィロンからイグナス・ジョゼフ・マルチノヴィッチへの手紙」）の全体構成の中で、『歌姫コンシュエロ』のウィーンへの旅の部分は非常に重要な役割を担っているように思われる。コンシュエロと少年時代のヨーゼフ・ハイドンがボヘミアからウィーンに向けて旅をする話であるが、もちろんそれだけではない。リーゼンブルクでの物語（22章～62章）の終わりにアンゾレート（ヴェネツィアでのコンシュエロの婚約者）が再び現れるとはいえ、ヴェネツィアでの物語（1章～21章）とリーゼンブルクでの物語はまるで独立したふたつの中編小説のような内容である。作者は、遠く離れてしまったアルベルトとコンシュエロの不思議な交感や、ヴェネツィアでライヴァルだったコリッラの再登場などによってこれら二つの物語をウィーンへの旅の部分に接続させ、続くウィーンでの物語（82章～99章）の宮廷音楽家たちの話に結び付けている。また、この旅の途中でトレンク男爵を登場させることによって、『ルードルシュタット伯爵夫人』のプロシアでの陰謀話へと繋ぎ、そして全編の最後にあたる「フィロンからイグナス・ジョゼフ・マルチノヴィッチへの手紙」中の流浪の音楽家としてのコンシュエロとその家

族出現の伏線も張っているのである。（なお、本稿では「音楽家」と言う言葉を作曲家だけでなく、歌手や演奏者を含めた意味で使用する。）

主人公コンシュエロがオペラ歌手であることから、作品全体において声に関する記述は無数にある。しかしながら、今回取り上げるテクスト中では、声が特に性や国の「越境」の主題と結びついている点に特徴があると思われる。まずは、ウィーンへの旅の部分における声への言及をいくつか読んでみよう。

コンシュエロとヨーゼフ・ハイドン少年が初めて出会った場面では、「それはとても優しく響きのよい声だったので、若い女性音楽家はすぐに自分への好意を感じとった」[3]と述べられている。いっぽうヨーゼフのほうはどうかというと、「コンシュエロの声の響きが彼には快適であると同時に心にしみ入るように思えた」(12)のである。音楽家である若いふたりは声をとおして相互に好感を抱いたのであった。初対面の人物にたいする、このような声による印象評価はその後も続いていく。ふたりがモルダウ河の渡し船で出会った男性マイヤーについて、「彼の声は感じがよく、態度は礼儀正しかったので、コンシュエロは彼の白髪混じりの髪と、まるで父親のような様子に信頼感を抱いた」(52)と、まず声に注目するのである。残念ながら、この第一印象には無残に裏切られることになるのではあるが。また、このマイヤー（プロシアの新兵徴兵係であったことが後に判明する）の毒牙から彼らを助けた恩人であるトレンク男爵については、「彼の声は、まるでその顔や考えや恋の希望と同じようにさわやかで男らしかった」(84)と描写されている。

以上のように、声はそれを発する人間の本性を端的に表すものであるとして、登場人物たち（およびこの小説の「語り手」）はそれにまず注意を向けるのである。それでは歌声についてはどのように描かれているのであろうか。コンシュエロの歌声について、語り手は「この時期、彼女の声の調子は世界じゅうの他の誰も肩をならべることができないほど、豊かで心にしみこむようだった」(33)と述べる。また、彼女が旅の途上で出会う聖堂参事会員にとっては「コンシュエロの声のように心の奥底まで揺り動かした声は今まで一度もなかった」(152)のであり、その声との出会いは彼の人生を大きく変えることになったのである。ウィーンへの旅において、コンシュエロの、人の心を揺り動かすような豊かな声の特質

が決定的な魅力として描かれていることに注目する必要があろう。レコードやテープレコーダーはもちろん、マイクも存在しなかった時代には、なまの声の力が、現代とは比較にならないほど重要だったのである。

以上のことを念頭に置きつつ、コンシュエロの越境についてこれから考えていこう。

1. 男装

ヨーゼフとともにウィーンに向かうことにしたコンシュエロであるが、ふたりはあまりお金を持っていなかった。長い旅の途上でおこるさまざまな不都合を予想した彼はコンシュエロに自分の服を着て少年に変装することを提案し、彼女はそれを喜んで受け入れる。

> 燈心草のようにほっそりしてたおやかな彼女の腰は赤いウールの幅広の帯の中でなめらかに動いた。そして、くるぶしの少し上で、ズボンのすその広い折り返しから雌鹿のように細い脚が慎ましく出ていた。彼女がどうしても髪粉をふらなかった黒い髪の毛は、病気をしている間に切られてしまったのだが、顔の周りで自然にカールしていた。(28)

女性の服と比べて自由に動け、足を見せる男性服の特徴と、当時の女性たちの大きな魅力のひとつであり、女性性のシンボルとも言える長い髪を切ってしまっていることがさりげなく描写されている。この変装の結果はどうだったのだろうか。少年となったコンシュエロは、旅の途上で出会った農婦たちにはたいへんな美少年に見え、穴のあくほど眺められることになるのであるが、この男装は、彼女が女性であることを知っているヨーゼフにさえも影響を及ぼすことになる。

> 衣装を変えるのがとてもうまくいき、本当に性の転換が起きたように見えたので、若者[ヨーゼフ]のほうの精神のありようも、すぐに変わってしまった。(28)

年上の女性にたいするヨーゼフの憧れは、このように同性の友人にたいする気安い友情のようなものに変化したのである。

ところで、ここに見られるような衣服と精神との緊密な関係、とりわけ女主人公の男装が大きな意味を持つ作品をサンドはいくつか書いているが、それらのうち、「男装」が主題となっている戯曲『ガブリエル』*Gabriel*（1840）にここで触れておきたい。時代は17世紀のイタリアで、主人公のガブリエルは祖父によって男として育てられた少女であったが、ある時、いとこのアストルフ青年とめぐりあう。彼はガブリエルを男だと思い、ふたりの間に友情が芽生える。ところが、彼はぐうぜん着替え中のガブリエルを見てしまい、彼女が女性であることを知ってしまう。ふたりは恋におちて結婚し、ガブリエルは妻としての生活を始めるが、女性となった彼女は昔の自由と幸福を失ってしまったことに気づく。息苦しい生活に耐え切れなくなったガブリエルは夫のもとを去って男としての生活に戻っていくが、間もなく悲劇的な最期を迎えることになる。これがあらすじである。長い間忘れられていたこの作品は、1988年に再刊されて以来、主にジェンダー論の観点から注目され、研究されるようになった。たとえば、新實五穂は「この女主人公の異性装は、結婚制度や家族制度に由来する女性の隷属状態を告発する装置の役目を担っている」[4]と書いている。『ガブリエル』は『歌姫コンシュエロ』より前に出版された作品であるが、男装した女主人公が女性の隷属を告発するという、ウィーンへの旅の物語と共通する点があるのである。コンシュエロによる告発についてはあとで検討したい。

作者のサンド（本名オーロール・デュドヴァン）自身も、ジョルジュという男性名をペンネームに使い、若い頃は男装で有名であった。回想録『わが生涯の記』*Histoire de ma vie*（1854-55）では男物を着用するようになったいきさつが詳しく語られ、次のような記述もある。

> 誰も私に注意を払わなかったし、私の変装に気づかなかった。私は男物をらくらくと着ていたうえ、服や顔つきが女っぽくなかったので、誰も不審に思わなかったのだ。[・・・]女性たちは、劇場においてさえも変装の仕方

> をほとんど知らない。彼女たちは細い胴、小さな足、動きのしおらしさ、目の輝きを犠牲にしたくないのだ。だが、これらすべて、特に視線をうまく使うことによって、容易に正体をみやぶられないようにすることができる。誰にも振り向かれずにあらゆる所にもぐりこんだり、耳もとでフルートの音ほども響かぬ低くて鈍い音域で話す方法もあった。[5]

サンドが自分の男装について述べる時にもこのように音域（diapason）という語を用いて声の性質を引き合いに出しているのを読むと、彼女がいかに声の力、あるいはその効果に敏感であったかがわかるのである。

2. 名

コンシュエロは少年の服に着替えたあと、今度は自分に芸名をつけることにして、「ベルトーニ」という「イタリアではありふれた名前」（30）を選ぶのであるが、本項ではヒロインの名前について考えたい。まず、この小説の題名ともなっている「コンシュエロ」である。スペイン語で「慰め」を表すこの名前について、『ルードルシュタット伯爵夫人』では次のように語られている。

> 私の父の名は存じません。[･･･]ヴェネツィアで母はジンガラ[ジプシー女]、私はジンガレッラ[ジプシー娘]と呼ばれておりました。母は私の名をマリア･デル･コンシュエロ、フランス語で言えば慰めの聖母から頂いたのでした。[6]

このように、コンシュエロという名は母が付けたものだとされている。そして、コンシュエロの父は作品中に登場しないし、彼女自身も自分の父方の背景には無関心である。だが、彼女の生涯においてまさに父親の役割を果たすことになるのが師ポルポラである。彼女はリーゼンブルクで次のように説明する。

> 私をここに送る際に、偉大なポルポラ先生は私に彼の名前を継ぐように命じました。これは自分の選んだ生徒に対して後援者や師匠たちが行う習

慣です。それで今では、偉大な歌手ウーベルト（ポルポリーノと呼ばれています）と同様に、光栄にも私はポルポリーナと名乗っています。[7]

ここからわかるように、ポルポリーナという名のほうは「父」が与えたものであり、父系を継ぐもの、音楽界における一種の貴族性を証明するものである。この名によって彼女は現実の貴族たちとも交流することができるのだ。また、その名は当時ベルリンで活躍していたポルポリーノと対になっている。彼はいわば双子の兄のような存在であって、『歌姫コンシュエロ』の終盤で彼女をベルリンへと引き寄せる人物なのだ。

「コンシュエロ」が母から、「ポルポリーナ」が父から与えられた名であるのに対して「ベルトーニ」は彼女が自ら選んだ名である。これはアルベルトという名の愛称のひとつであり、この選択は彼女が不実なアンゾレートとの関係を断ち切って、アルベルト・フォン・ルードルシュタットのほうを自分の運命に結びつけたことを示している。また、この名の持つもうひとつの重要性は、これがイタリアの名前であるということだ。主人公たちが旅をするボヘミアとオーストリアにおいて、この名は「イタリアの男」であるというメッセージを発し、次項で検討する「イタリアの声」の幻惑の基盤となるからである。

3. イタリアの声

外見を少年に変えたコンシュエロは、旅を続ける費用をかせぐために歌おうと考えて、自分の声は変声期前の男の子の声として通ると言うが、このように少年の声が話題になる時にはほとんど必ず声変わりの問題が持ち出される。元軍楽隊指揮官のマイヤーは「子どもから青年になるのは、男の子にとってあやふやな試練だ。ひげが生えると声を失うことも時々あるよ」(53)と言って、ベルトーニに楽器の演奏を学ぶように勧める。また、ヨーゼフも「ぼくの声は上達して合唱隊で一番美しい声とみなされるようになりました。[・・・]でも、教会の規則に従って聖歌隊養成学校を出なければならない年齢が恐怖とともに近づいていました」(16)と回想する。小説中ではこのように、まず少年のままでいることの困難さや大人の男になることの不利が語られるのである。

さて、ベルトーニとベッポ（ヨーゼフの芸名）はオーストリアの小さな村のミサで歌って人々に感銘を与える。その村のオルガン弾きで靴屋のゴットリープはベルトーニの歌声について「あれはイタリアの声で、他にあのような声を以前に聞いたことがある。システィーナ礼拝堂の声だ」（112）と言い、村の司祭をはじめとする人々はその説明に納得したのであった。このイタリアの声（voix italienne）とは何だろうか。オーストリアの人々は、いくら田舎とは言えボーイソプラノの声を知っていたはずであるから、この言葉で意味するのは普通の少年の歌声より高くて豊かな声ということであろうか。音楽における先進国であるイタリアの少年歌手は特別な声を出すことができるのだろうと人々は考えて納得したのかもしれない。あるいはまた、当時、特にイタリアでもてはやされたカストラートの声を思い浮かべたのかもしれない。

カストラートは16世紀以降のヨーロッパで、声の美しい少年が去勢によって、声変わりをせずに、広い音域で高い声を出せるようになった歌手であり、17世紀後半から18世紀前半にかけて全盛期を迎えていた。歴史上有名なカストラートであるファリネッリとカッファレッリ（カッファリエッロ）はポルポラの弟子であった。『歌姫コンシュエロ』のウィーンでの物語においてコンシュエロたちはカッファリエッロに会うことになろう。なお、著名なサンド研究者ベアトリス・ディディエは、コンシュエロとカストラートの関係について、かつて次のように書いていた。

> コンシュエロは、その声はメゾ・ソプラノなのだけれど、一種のカストラートとなる。（ポルポリーナは確かにD. フェルナンデスのポルポリーノ[8]のモデルだ）。彼女の変装は小説における去勢のイメージとして現れる。パラドックス的な去勢だ。なぜなら通常とは逆に、それによって女が男に変装することになるから。[9]

衣服と名前を変えることによって、女が男の声を持つ逆カストラートとなったコンシュエロは性の境界を自在に行き来することができるのであった。

ウィーンへの旅に戻ろう。聖歌を歌ったベルトーニの声は、ミサにやってき

た高貴な聖職者である聖堂参事会員を熱狂させる。彼はベルトーニに「きみはカッファレッリかファリネッリの息子だ」(141)と冗談を言う。これらの有名なカストラートに実際に子どもがいるはずはないのであるが、この言葉は聖堂参事会員の、自分では意識していない願望に関連していると考えられる。彼は美しい声を持つ聡明なベルトーニ少年を愛し始めていたのである。

> 彼がウィーンの大聖堂で参事会員として務めていたとき、聖歌隊養成学校で多くの美少年を見たことがあった。彼らの声は澄んでいて、銀のような音色で、純粋さと柔軟性ではまるで少女の声のようだったが、ベルトーニの声はそれよりずっと純粋で柔軟だった。しかし、あれはイタリアの声だと彼は考えていた。それにベルトーニは例外であって、その才能、天分、能力が奇跡であるような早熟な少年なのだと思った。[・・・]彼は父性愛と慈しみ深い誇りにすっかり駆られていて、良心がそれに対してひるむことはなかったのである。(153)

聖堂参事会員自身、自分がベルトーニに対して抱いているのが父性愛なのか恋愛感情なのかがわからなかったのである。非常に優れた音楽の素養を持つ彼がベルトーニの声を女性の声であると見抜けなかったのは、聖職者であるがゆえに恋愛感情を抑圧していて、その声に「イタリアの声」、つまり外国の男の声という無意識の言いわけを与えることができたからである。

4. 束縛される女たち

> 衣装を身につけたとたんに役者たちに起こるように、彼女は自分が役にはまりこんだと感じ、これから演じようとする人物になってしまった。むじゃきな放浪の呑気さや喜び、道草をする少年の体の快活さ、力、軽やかさのようなものを感じるまでになったのだ。(28)

こうして、男装したコンシュエロは心の持ち方や性格までが少年のようになり、ヨーゼフをはじめ周りの人々も彼女を少年として扱うようになった。そして、

コンシュエロのほうも今までとは違った目で周囲を見るようになる。たとえば、自分たちに一夜の宿を貸してくれたボヘミアの農民一家の女たちについてのコンシュエロの観察であるが、「このかわいそうな女たちが夫の後ろに立ってうやうやしく食事を出し、そのあと陽気に彼らの食べ残しを食べ、ある女たちは赤ん坊に乳をやり、他の女はすでに本能的に若い男たちの奴隷になって、自分の娘や自分自身のことを考えるより先に、彼らの世話をしている」(36)のを見た彼女はこれらの女たちの男性への従属に心を痛める。[10]また、彼女は心ならずもコリッラの(アンゾレートとの間にできた子どもの)出産に立ちあうことになる。

> 信仰も情愛も持たない女が呪詛と冒涜の言葉を吐きながら出産という厳かな殉教をするというおぞましい場面に、かわいそうなコンシュエロは立ち会った。無垢で信仰厚い少女はこの拷問を見て震えた。その痛みが和らがないのは、神聖な喜びと宗教的な希望の代わりに、不満と怒りがコリッラの心を占めていたからだ。(138)

ここでは女性の肉体的な営みのひとつである出産が「厳かな殉教」(auguste martyre)と呼ばれ、それがどれほどむごく女性を苛む「拷問」(tortures)であるかが示されている。コンシュエロは、「イタリアの声」を持つベルトーニ少年として、貧しいながらも自由気ままな流浪の音楽家の境遇の方が、男たちに従属する農民の女たちの生活や、出産の責め苦にうめくプリマドンナのそれよりもずっと良いと考えるのである。性を越えることによって、コンシュエロ＝ベルトーニは周りの女たちの肉体的・社会的な原因による悲惨をより客観的、より冷静に見ることができたのであった。

5. 声の価値

コンシュエロが見たのは女性たちの屈従だけではなかった。農村では男たちも大地に隷属させられて、自分たちの犂と家畜の従者となり下がっていたからである。重税にあえぐ彼らの暮らしを知ったコンシュエロはヨーゼフに「この世では、私たちだけがお金持ちだって言わなかったかしら。私たちの声には税

金はかからないし、好きな時だけ働くのだから」(37)と意見を述べる。ウィーンへの旅では、このようにコンシュエロやヨーゼフの声の価値に関する言及がさまざまな個所に見られる。たとえば、ヨーゼフに酒をどんどん飲ませようとするマイヤーに対してコンシュエロは「生きるためにぼくたちは声しか持っていないのです」(60)と言って、声に悪影響を与える飲み物をきっぱりはねつける。別のところで、聖堂参事会員はコンシュエロの声について「宝」(trésor)と表現している。また、彼女とヨーゼフは行き倒れ寸前の母子を助けるために有り金をはたいてしまうのだが、そのあとに次のようなやりとりがある。

> 笑いながらコンシュエロは財布の中にどのくらい残っているかたずねた。ヨーゼフはバイオリンを取りあげて、耳のそばでかき鳴らして答えた。「音だけですよ!」
>
> 野原の真ん中でコンシュエロは華々しいルラードで声を試してから叫んだ。
>
> 「音はたくさん残っているわ!」(104)

ここにも金銭と等価の声のイメージが現れているのである。そして、コンシュエロの声およびヨーゼフのバイオリンについては別の比喩も使われることになる。聖堂参事会員の従僕アンドレは、「あなた方の声とバイオリンのようなパスポートがあるのですから、わが主人から歓迎されるに決まっていましたよ」(120)と言ってふたりを屋敷に招き入れる。コンシュエロの声は特権的な場所や境界線の向こう側へのパスポートなのである。だが、それはまたコンシュエロたちをプロシアに拉致して軍楽隊に入れようとしたマイヤーの企みのようなことを引き起こす。音楽の、とりわけ声の力によって、好むと好まざるとにかかわらずコンシュエロは国境を越えることになるのだ。

おわりに

> アーティストやジプシーであるほうが、領主や農民であるより良いのだと彼女は思った。というのも、不正な専制か強欲による陰うつな束縛が土地

の所有や麦束の所有に結びついているからだ。「自由万歳！」と彼女はヨーゼフに言った。(36)

この引用のように、コンシュエロとヨーゼフの旅はふたりに自分たちが目にしているものについて考えさせ、既存の秩序や価値観を再点検するきっかけを与えることとなった。また、この旅で出会ったトレンク男爵とは、『ルードルシュタット伯爵夫人』の秘密結社「見えざる者たち」のメンバーとして再会することになる。コンシュエロたちのウィーンへの旅は国際的なネットワーク作りの第一歩であったことが後に判明するのだ。「見えざる者たち」の一員となって、コンシュエロは理想社会を思い描くことができるようになり、オペラ歌手としてヨーロッパじゅうをめぐって彼らの国際的プロジェクト（自由、平等、友愛にもとづく新社会建設）に加わることになるのである。21世紀の読者から見れば、コンシュエロはローカルな文化（ヴェネツィアの音楽、ボヘミアのフォークロアなど）を理解し吸収することによって偉大なアーティストとなり、さらに、旅することで各地のさまざまな人や物事を観察し学んだことで、グローバルな理想（18世紀半ばの物語なので、ヨーロッパ限定ではあるが）の実現をめざせるようになったと言えるであろう。

人間の声は肉体から発せられながらも、目に見えず質量を持たない。それは、文字の出現以前から、肉体と思想・理想を仲介し繋ぐものであったとも言えよう。さらに、本稿における考察によって、コンシュエロの声は男と女、国と国との境界を越える（越えさせられる）原因や手段として描かれていることがわかった。『歌姫コンシュエロ』と『ルードルシュタット伯爵夫人』の中で、彼女はその声の力によって、女性を囲いこむ枠を越えて、広い視野で人類の未来を想像できるようになったのである。また、サンドがコンシュエロのウィーンへの旅の物語で描いたこと、すなわち、地に足をつけて歩くこと[11]と人間のなまの声に注意を払うことの甘美さと重要性は、飛行機やコンピュータの普及によって18・19世紀とは比べ物にならないほど便利で機械的・人工的な世界に住む我々21世紀の読者にとって、既成の価値観を再検討するためのシンプルではあるが貴重なメッセージともなっているのである。[12]

1 『歌姫コンシュエロ』と続編『ルードルシュタット伯爵夫人』のあらすじは次のようなものである。

『歌姫コンシュエロ』

18世紀半ばのヴェネツィアで、大作曲家ポルポラに見いだされ、その弟子となったコンシュエロがオペラ界に華々しくデビューする。彼女はプリマドンナのコリッラの嫉妬や劇場のパトロンの誘惑をうまくかわすが、幼なじみの婚約者であるテノール歌手のアンゾレートとの恋に破れてヴェネツィアを去る。恩師ポルポラの養女となったコンシュエロは、ボヘミアのルードルシュタット伯爵の館リーゼンブルクに招かれて、伯爵の息子アルベルトの婚約者に音楽を教えることになる。アルベルトはその極端に情け深い性格と超能力のために、まわりの人々から理解されずに孤立し、狂人扱いされていた。彼はコンシュエロを愛するようになるが、彼女はリーゼンブルクを去ってポルポラのいるウィーンに向かう。その途中、彼女はヨーゼフ・ハイドン少年と出会い、ふたりはウィーンまでいっしょに旅をする。彼女はウィーンでポルポラに再会するが、この都になじめず、フリードリヒ大王の君臨するプロシアのベルリンに行くことになる。だが、旅の途中で、ボヘミアのアルベルトが重病であることを知らされる。愛する彼女を待ちわびていたアルベルトは、コンシュエロと結婚式をあげた直後に息をひきとってしまう。今やルードルシュタット伯爵夫人となったコンシュエロは、再びベルリンをめざして旅発つのだった。

『ルードルシュタット伯爵夫人』

夫の死から1年後、コンシュエロはベルリンのイタリアオペラのプリマドンナになっていた。宮廷の陰謀事件に巻き込まれた彼女はシュパンダウの牢獄に幽閉されるが、謎の団体「見えざる者たち」によって救出される。彼女は、この団体が専制を倒して自由、平等、友愛の社会を作ることを目的とした秘密結社であることを知る。そして、死んだはずのアルベルトが実は生きていて、そのメンバーになっていることも知らされる。彼らの仲間となったコンシュエロは、もう一度アルベルトと結婚する。そののち数年間コンシュエロは歌手として活動しながら、夫とともに「見えざる者たち」の理想のために働くが、やがて迫害によって団体は解散し、ふたりは貧窮の生活を送ることになる。しかし、彼らとその子どもたちは、きたるべき社会の福音を伝えながら、流浪の音楽家として愛し合い支え合って生きていく。

2 『歌姫コンシュエロ』は次の5つの部分に分けることができよう。1. ヴェネツィアでの物語、2. リーゼンブルクでの物語、3. ウィーンへの旅、4. ウィーンでの物語、5. ロスヴァルトとリーゼンブルクへの旅。

3 George Sand, *Consuelo La Comtesse de Rudolstadt*, Meylan, Les Editions de l'Aurore, 1983, Tome II, p.12. これ以後の引用は末尾にこのテクストのページ番号のみをかっこに入れて示す。引用の翻訳にあたっては次の日本語訳を参考にさせていただいた。持田明子・大野一道監訳『歌姫コンシュエロ』上・下、ジョルジュ・サンドセレクション3・4、藤原書店、2008。

4 新實五穂「性を装う主人公 『我が生涯の記』『ガブリエル』」、日本ジョルジュ・サンド学会編『200年目のジョルジュ・サンド』新評論、2012、36頁。

5 George Sand, *Histoire de ma vie*, in *Œuvres autobiographiques*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, Tome II, 1978, p.118.

6 Sand, *Consuelo La Comtesse de Rudolstadt*, Tome III, p.59.

7 *Ibid*., Tome I, p.203.

8　ドミニック・フェルナンデスの小説『ポルポリーノ』*Porporino*（1974）はカストラートと性の主題を真正面から取り上げている。ディディエの指摘にあるように、この18世紀後半の南イタリアの寒村に生まれた主人公の物語にサンドの『歌姫コンシュエロ』と『ルードルシュタット伯爵夫人』が大きなヒントを与えているのはほぼ間違いないようである。

9　Béatrice Didier, *L'Ecriture femme*, Presse Universitaires de France, 1981, p.159.

10　男たちが食事をしている間、女たちがうしろに立って給仕するという姿はサンドが暮らすベリー地方の農村の現実であり、この習慣は20世紀まで残っていたようである。*La Porporina : Entretiens sur Consuelo*（Actes du colloque de Grenoble 4-5 octobre 1974 présenté par Léon Cellier）, Presses Universitaires de Grenoble, 1976, p.51を参照。

11「彼女はその感性のすみずみまで芸術家だったので、歩く者だけがまるごと所有できる自由、偶然、勇気と機転のある行いや、この自然の連続して変化する光景、つまり、流浪の孤独な生活のロマネスクな活動のすべてを愛さないわけにはいかなった。」（96）

「だから歩こう、足をいたわることなく。しかし、害のない休息や悔恨のない孤独のように、めったにない有益な情況のもとで、もし緑の小道が我々の足もとに現れたなら、孤独と観想の数時間を利用しよう。活動的で熱心な人々にとって、こののんびりとした時間は自分の力をふるい起こすためにとても必要なものなのだ。」（97）

12　本稿は平成25~27年度科学研究費助成事業「サンドとスタール夫人における音楽と旅：性と国境を越える試みに関する研究」（課題番号25370355）の成果の一部です。関係機関および関係者に深くお礼を申し上げます。

Réflexion sur la voix — Voyage à Vienne dans *Consuelo* —

Chiyo SAKAMOTO

Nous allons étudier principalement, dans cet article, comment George Sand décrit la « voix » de la cantatrice Consuelo, ainsi que la signification qu'elle lui donne, en analysant certaines descriptions présentes dans la partie 'Voyage à Vienne' de son ouvrage *Consuelo* (chapitres 63~81). L'héroïne, voulant se rendre dans la capitale autrichienne, décida de se travestir en jeune homme et de prendre comme « nom de guerre » celui de Bertoni (diminutif d'Albert). Ce choix montre que Consuelo avait laissé tomber définitivement Anzoleto, son fiancé infidèle, pour lier son destin à celui d'Albert de Rudolstadt. Un autre avantage de ce prénom était qu'il lui permettait d'être considéré comme « italien ».

Dans un petit village autrichien, où Bertoni chanta, on appela sa voix la « voix italienne ». A travers cette appellation se trouverait une évocation des « castrats», alors à leur apogée surtout en Italie. Consuelo, grâce à son déguisement ainsi qu'à son nom de guerre masculin, devient alors une sorte de « castrat paradoxale », pouvant traverser comme elle le souhaite la ligne démarquant les deux sexes. Ainsi, cela lui permet de voir, de manière plus lucide et plus objective qu'avant, les misères physiques et sociales des femmes. Sa voix lui faisait aussi office de « passeport », lui permettant de traverser les frontières européennes afin de travailler à un projet international plus vaste : celui de construire une nouvelle société idéale. Projet que nous retrouverons dans *La Comtesse de Rudolstadt*.

Keywords : George Sand, *Consuelo*, voix, voyage, déguisement
キーワード：ジョルジュ・サンド，コンシュエロ，声，旅，男装